

発達心理学概論[特論] 【第12講-2】

テキスト第VI章後半

# 想像力の発達

—ディスコースの成立と語りの意義—

内田 伸子

(お茶の水女子大学)

[uchida.nobuko@ocha.ac.jp](mailto:uchida.nobuko@ocha.ac.jp)

# ことばと創造的想像力



No.4

大江光さんの作曲活動  
—光さんはどう教育されたか—

# 大江光さんの作曲活動

## ★障害1 「水頭症」

- ・頭蓋骨の一部に穴
- ・脳の内容物が漏れないように外側に袋(脊髄液)

## ★障害2 「脳分離症」

### ①脳梁の一部に損傷

→右脳と左脳の連絡(神経線維の軸索の束)

### ②左脳の一部に損傷

→運動のプログラミング

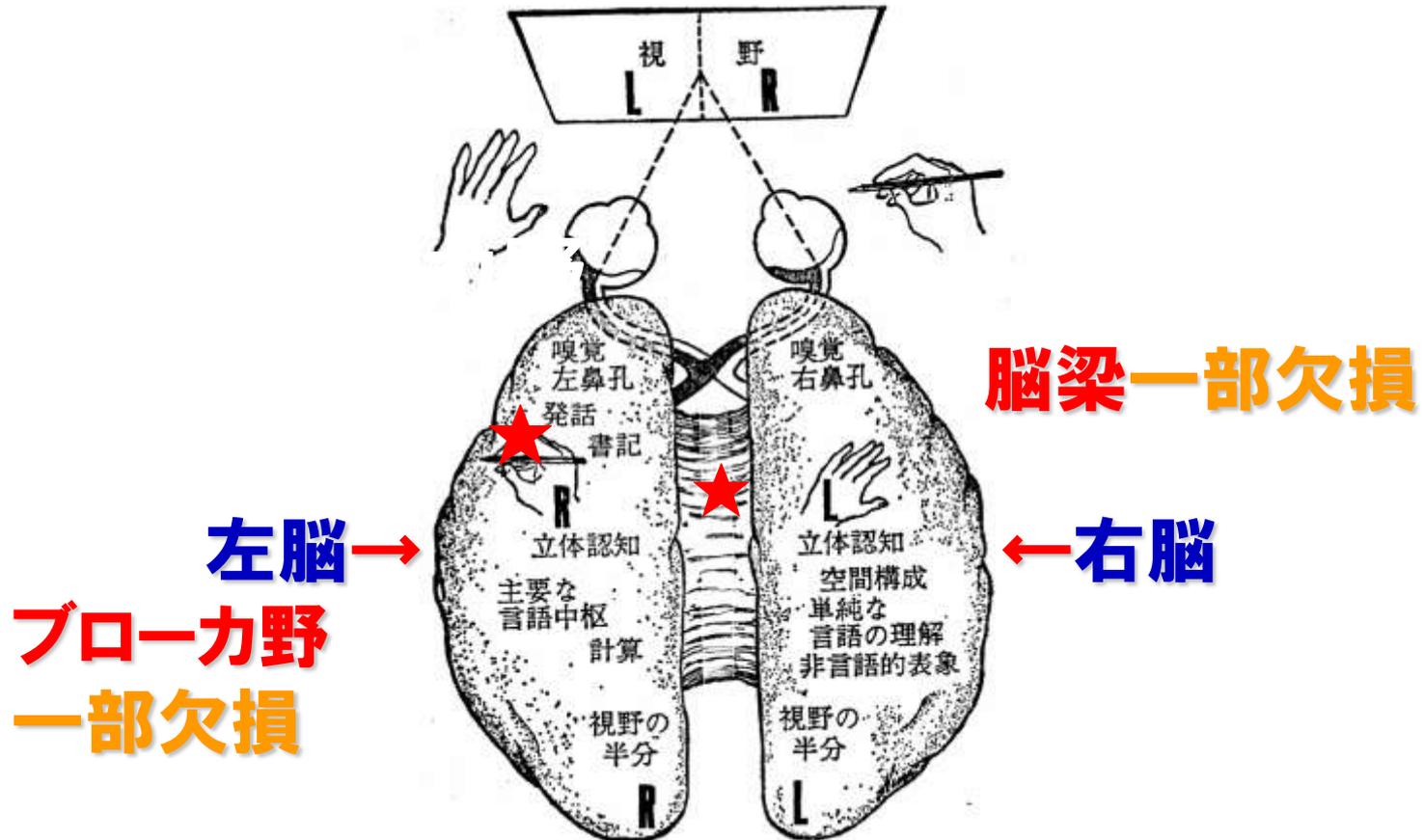
★「ブローカ野」は発音の調整

## ★脳機能の局在化(lateralization)



# 脳機能の局在

- 左脳＝理性（言語・計算）
- 右脳＝感性（地図・空間構成・音楽）
- 脳梁＝左脳と右脳の連絡と制御



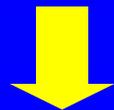
# ★障害2 「脳分離症」

①脳梁の一部に損傷

→右脳の活動を左脳に伝える

②左脳の一部に損傷

→右脳の内面をことばで表現する



## 1. 運動機能の発達遅滞

★指先の抑制機能 → ピアノ

## 2. 言語の発達遅滞

★初語(有意味語):4歳

“べーべー” “モーモー” → 音楽



## (1)ピアノへの接近:

①指先の運動機能の訓練

②「音当てゲーム」

符記法

和音の仕組み

メロディーのつなぎ方

## (2)音楽への接近:

FM放送やレコード

## (3)作曲活動へ:

★音のユニットを五線紙に書き入れる

(和音の構造材を一段ずつ積んでいくように)



パロツク・ワルツニ長調

The first system of handwritten musical notation for a piano piece. It consists of two staves, treble and bass clef. The key signature has two sharps (F# and C#), and the time signature is 3/4. The music begins with a treble clef and a key signature of two sharps. The melody in the treble clef starts with a quarter note G4, followed by quarter notes A4, B4, and C5. The bass clef accompaniment starts with a quarter note G3, followed by quarter notes A3, B3, and C4. The piece is in a 3/4 time signature.

The second system of handwritten musical notation. The treble clef staff features a melody with a half note G4, a quarter note A4, and a quarter note B4. The bass clef staff continues with a steady quarter-note accompaniment. A dynamic marking 'p' (piano) is present in the treble clef staff.

The third system of handwritten musical notation. The treble clef staff shows a melody with a half note G4, a quarter note A4, and a quarter note B4. The bass clef staff continues with a steady quarter-note accompaniment.

The fourth system of handwritten musical notation. The treble clef staff features a melody with a half note G4, a quarter note A4, and a quarter note B4. The bass clef staff continues with a steady quarter-note accompaniment. A dynamic marking 'p' (piano) is present in the bass clef staff.

The fifth system of handwritten musical notation. The treble clef staff features a melody with a half note G4, a quarter note A4, and a quarter note B4. The bass clef staff continues with a steady quarter-note accompaniment.

# 「Mのレクイエム」

子どもの頃からの主治医森安先生の逝去：

光さんはソファの隅に隠れてうずくまっていた。

田村久美子先生

「悲しいときに、お誕生日にプレゼントするように、プレゼントするのよね。それは『レクイエム』っていうの。」

と呼びかけると、光さんは、まず楽譜の題を記入する線の上に「レクイエム」と書き入れ、学校で習っているアルファベットのMを書き加えた。

→田村先生の目の前で短調の悲しい曲想の音符を殆ど一気に、書き入れた。

(2003. 9. 23. インタビューメモより)

# 「Mのレクイエム」

## 「示唆＝援助支援」

その曲は短いので、もう少し長くしてもらいたかった。  
T「森安先生は、天国にいらしたかもしれないしね」と  
言うと、光さんは長調で先をつなげ、曲をしめくくった。

## 田村先生の指導方針：

「私が直しちゃうことは絶対にすまい。彼がなぜそれを使いたいのか、洞察をもつようにした。」

## 田村先生の教育原理

「“教える”ということは、ゼロになって子どもと共にすわること。子どもの横にすわること」



## (4)作曲活動と感情:

強い感情状態のとき

◆悲しみ・苦しみ

→音楽として客観化

●愛・嬉しさ

→音楽として昇華

## (5)示唆:

★ ペースが遅くても快適な状況のなかで  
結局はマスターできる

①音楽経験の蓄積

②音楽「文法」和音の学習

③「**地上の人間の音楽の主題と文法で**」

(c.f., 天井の意志にサジェストされて)



# 「新しい作曲の習慣」

大江健三郎「伝える言葉」

2005年5月10日 朝日新聞

◆レッスンでは**言葉の比重が増えてきた。**

◆N響アワーを見ているとき

光さん「いまの転調が下属調」と解説

★「かつては光の心と音楽の間には直接の  
パイプが通じていて言葉は入り込まない、  
その印象だったのです。」



# 光さん⇔音楽:ことばが媒介に

◆かつては電話をとったとき返事はしても自分から言葉を発することはなかった。

★電話で、会話で妹と広島カープの昨夜の成績を話したり、午後放送される指揮者ゲルギエフの演目を妹に解説してあげる。

★自分から五線紙に向かっている！！

# 光さんの作曲ぶり⇒変化

◆7年前までは1日か2日で曲を作った。

★今は数日から数週間かけるようになった。

消しゴムを使っては書き直し、五線紙をひろげてじっと考えている時間も多くなった。

★曲の構成法「はやくち」も含まれる；

最初の発想は生きているが、スピード感に次つぎの展開が加わり、会話劇が進行して愉快に締めくくられる。

# 音楽センスをことばで理解して作曲

★自分で美しいと感じる音楽をことばによって  
(メタ的想像力)理解したうえでの意識的な工夫が創作を支えている。

★ことばが光さんを変えた！

◆◆憂い顔で食堂の隅に座り込んで無言

★今は笑いながら電話で話している



# ことばが作曲スタイルを変えた！

◆最初のCD: 感覚的なきらめきと記憶によるもの。

★次のCD: 光さん自身の感情的な経験を音楽にしている。

## 転換期: 7年後

音楽理論のレッスンや妹が考え出した言語訓練(会話の訓練: 答え=精緻化・援助的質問応答・理由づけ・援助)で、

⇔ことばの力をしっかりさせた！

**「老年の私が思うこと。」**

**「自分が立ち去るとき、妹は  
起ったことを言葉で光に理  
解させ、光は知的な明るさの  
音楽を作る。」**

**大江健三郎**



7月16日⇒月曜日の振り替え

● 次回 7月23日 第VII章



to be continued

